

大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生生活充実度の推移

心理学部 奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子

抄録：大学生生活にさまざまな意義を認めるためには、大学に適応し充実感を感じる事が重要であると考えられる。そこで本研究では、先行研究を踏まえて、1回生から4回生までを対象に大学生生活充実度尺度を実施し、その因子構造について検討した上で、大学生生活充実度が学年ごとにどのように異なるのかについて、縦断、横断を含めた複数の観点から分析を行った。まず大学生生活充実度尺度については、因子分析によって“フィット感”、“交友満足”、“学業満足”、“不安”の4因子が抽出された。そして複数年度の1~4回生の横断および縦断データから、4回生時に充実度全般が最も高まることが明らかになった。一方、1~2回生にかけては充実度にほとんど変化が見られず、2~3回生にかけては部分的に充実度が高まるという結果と、ほとんど変わらないという結果の、相違する二つの結果が得られた。今後はさらにデータを集積し、上記の結果を再検討することや、大学生生活充実度に学年差をもたらす要因を詳しく検討していくことが課題とされた。

キーワード：大学生生活充実度、大学への適応、学年差、横断データ、縦断データ

問題

個人のライフサイクルにおいて大学生時代は、様々な経験を通して、自分らしさや自分とはどのような人間かについて考える時期であり、社会に出るための準備期間として位置づけられる(及川・坂本, 2008)。しかし大学生生活にそのような意義をもたらすためには、大学に適応し、大学で過ごす中で充実感を感じる事が重要な意味を持つ。では、大学における適応や充実感といったものはどのように考えられ、測定されているのだろうか。

大学における適応感・充実度の測定

広沢(2007)は、特に新入生が大学に適応していく過程において、2つの側面、すなわち、対人関係面(友人関係、教員との関係など)と学習面の2つの側面が重要であることを論じている。さらに広沢は、大学に入学して半年後、学習面で適

応している学生は、そうでない学生と較べて学部・学科に適応しており、学習面のみならず対人関係面においても自信を持っていることを示している。すなわち、学習面での適応と学部・学科への適応に関しては相互関連性が強いことが示唆されている。吉田・橋本・安藤・植村(1999)の研究においても、学部の友人関係親密度や教員との親近感が学習への取組と有意な相関を示している。これらは大橋・吉田・坂西(1982)や吉田・坂西(1984)の研究とも整合的な結果である。

大久保・青柳(2003)は、大学生用適応感尺度を大学という具体的環境に適用させ、個人と環境の整合性の観点から大学適応感尺度を作成している。そして因子分析に基づき、“居心地の良さの感覚”(「周囲に溶け込んでいる」「周りの人と楽しい時間を共有している」)、“被信頼・受容感”(「他人から頼られていると感じる」「必要とされていると感じる」)、“課題・目的の存在”(「熱中できるものがある」「好きなことができる」)。

“拒絶感の無さ”（「その状況で嫌われていると感じる」「無視されていると感じる」など）の4因子を抽出した。大久保・青柳（2005）が、この大学環境への適応について、社会的スキルによる影響を検討したところ、入学当初の社会的スキルは後の大学適応を予測する指標としては不十分であるという結果が示されている。

松原・宮崎・三宅（2006）は大学生のメンタルヘルスという観点から、“学業のつまずき”（「単位について不安がある」「自分の成績は良くないと思う」など），“大学への不本意感”（「他大学への編入学を考えたことがある」「大学が自分の期待していたものとはちがう」など），“不規則な日常生活”（「食事をとるのが不規則である」「寝る時間が不規則である」など），“大学生活への充実感の乏しさ”（「大学の行事にはよく参加している」「学内の友人が少ない」など），“自分への自信のなさ”（「将来が不安である」「自分の容姿（顔つきや体つき）が気になる」など）といった因子によって構成される大学生生活の適応感尺度を用いて調査を行っている。その結果、「大学に行きたくないときがある」といった意識レベルでの不登校傾向には“大学への不本意感”，“学業のつまずき”，“不規則な日常生活”が影響を与える一方で，“特に理由もなく講義を欠席する」といった行動レベルでの不登校傾向には“不規則な日常生活”，“学業のつまずき”，“自分への自信のなさ”が影響を与えていることを明らかにしている。

亀岡（2006）は、大学生活についての認知次元として、因子分析に基づき“実践”“自由度”“主体性”“不安”“交友”の5因子を抽出している。“実践”は、「授業は高等で実践的だと感じる」などの項目に高く負荷し、大学ではこれまで以上の高度な知識や技術を身につけることができるという大学教育、特に授業に対する期待に関わる因子である。“自由度”は、「自由に行動できる時間が長い」などの項目に高く負荷し、自由やゆとりもしくは開放的な雰囲気を表す因子である。

“主体性”は、「大学では全てを決めるのは自分であり、自主性が尊重される」などの項目に高く負荷し、自らの行動を主体的に選択し、その選択に責任を負うことに関わる因子である。“不安”は、「授業の内容が濃くて、ついていくのがつらいと感じる」などの項目に高く負荷し、主に講義に対する不安に関わる因子である。“交友”は、「大学では気の合う友達ができ楽しい」などの項目に高く負荷し、大学における対人関係、とりわけ友人関係に関わる因子である。

このように様々な研究報告がなされる中、筆者らも新入生オリエンテーションの効果研究の一環として、これまで継続的に大学における適応や大学生生活の充実度の測定とそのための尺度作成を行ってきた。まず、佐久田・奥田・川上・坂田（2003）において大学生生活満足度尺度を作成し、因子分析に基づいて、“学業満足度”（「大学の授業が面白い」「心理学科の授業内容に満足している」など），“交友満足度”（「学内の友人関係に満足している」「大学で本当に親しい友人はいない」など），“将来展望”（「これからの大学生生活の先が見えず不安である」「将来の進路について不安である」）の3つの下位尺度を構成した。しかしながらこの尺度は項目数も10項目程度と少なかったため、大学生生活の充実度をより適切にとらえ、その測定を可能とする尺度を作成することがあらためて必要であると考えられた。そこで川上・坂田・佐久田・奥田（2005）は、佐久田他（2003）の項目をもとに、大学生生活や高校生活に関する満足度、適応感などの測定を意図した先述の研究を含む複数の文献（河村，1999；大久保他，2003；若杉・安田・榊原，2004；酒井，2000など）を参考にしながら、45項目からなる大学生生活充実度尺度を作成した。この尺度を大学1回生100名程度に実施し、そのデータに基づいて因子分析を行った結果，“交友満足”（「学内の友人関係に満足している」「大学では周囲に溶け込んでいる」など），“学業満足”（「大学の授業が面白い」「学びたいことが

大学で学んでいる」など)，“不安”(「これからの大学生生活の先が見えず不安である」「ちゃんと卒業できるか不安である」など)，“適応”(「この大学は自分に合っていないような気がする」「大学は居心地が良い」など)，“可能性”(「大学ではいろいろな可能性が開けていると思う」「大学ではいろいろなことができそうだ」)の5つの因子を抽出し、下位尺度を構成した。

この尺度では、冒頭で述べた広沢(2007)その他の研究で共通して指摘されている、大学における適応を捉える上で主な二側面である対人関係(交友関係)と学習(学業)に関する因子が抽出されており、また他の因子も諸研究で見出されているものと共通性が高いことから、尺度としてまず妥当であると考えられる。しかしながら、因子分析を行ったデータは大学1年生のみを対象としたものである点において、大学4年間の適応・充実度の因子あるいは測度として適切であるか、あらためて検討する必要がある。

それゆえ本研究では、1年生から4年生までのすべての学年を対象に大学生生活充実度尺度を実施し、因子分析を行ってその因子構造と尺度構成について再検討することを第一の目的とする。

大学への適応・大学生生活充実度の学年差と経年的推移

大学生の大学生活を支えることは、そこでの適応感を高めるだけではなく、その後の人生をも間接的にサポートすることにもつながるとの指摘もある(石倉・吉岡, 2004)。そうした意味では大学での適応は、入学後に大学“に”適応することのみならず、持続的に適応感を持ち続ける、あるいは充実感を持ち続けることに大きな意味があると言えよう。大学生活の中で、その適応や充実感がどのように推移するのかについては、これまでも様々な研究がなされている。たとえば大学適応における学年差に注目した研究がある。

そのひとつとして片倉・土田(1993)は、単科

の看護短期大学の1年生～3年生を対象に、短大生活と適応に焦点を当てて調査を行っている。その結果、学年ごとに、「1年生は、学習を含めて何事に対しても積極的・意欲的に取り組もうという向上心が強く、学生生活に期待するものも多く適応行動がみられる。2年生は、学生生活全般に適応してきているものの、今まで以上の変化を求めようとする意欲が低下している。3年生は、学生生活における充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に取り組みたい気持ちがある反面、長期間に及ぶ臨地実習のため、精神的・肉体的なゆとりが持てず不満が強い。」という傾向が認められた。

また大学生が学生生活において感じている不安の種類や水準を測定するために開発された大学生生活不安尺度(藤井, 1998)の下位尺度について、学年差を検討した田中・菅(2007)は、大学不適応においてのみ、学年差を見だし、4年生において1年生よりも大学不適応尺度の得点が低いことを報告している。

教育学部に所属する学生に対して大学生活に関する縦断的調査を実施した吉田他(1999)は、1年次は大学進学に伴い、皆が多くのイベントを経験するが、2年次になると個人差が生じてくることを示している。

このように大学4年間の適応に関する研究がいくつか報告されているが、筆者らの研究においても、上記の大学生生活充実度尺度を用いた過去の一連の調査によって1～4年生を対象としたデータが幾つか得られている(川上他, 2005; 川上・坂田・佐久田・奥田, 2007, 2008, 2009, など)。そこで本研究では、これまで収集した大学生生活充実度のデータについて大学4年間の差異あるいは経年変化という観点からまとめて分析を行うことにする。すなわち、女子大学のある学科に所属する学生を対象に、その大学生生活充実度が学年ごとにどのように異なるのかを検討することを、本研究の第二の目的とする。その結果が他の先行研究

の学年間差あるいは経年変化の結果と整合的であるかを確認することは、大学生生活充実度尺度の妥当性を検証することにもつながると期待される。

研究 1

目的

1 回生から 4 回生までのすべての学年を対象に横断的に調査したデータから大学生生活充実度尺度の因子分析を行い、過去の研究において抽出された因子との比較と再検討を行う。その上で、大学生生活充実度の 1~4 回生の学年間の差異を検討する

方法

調査時期 2006 年 11 月, および 2007 年 10 月

被調査者 2006 年度は 1 回生 61 名, 2 回生 84 名, 3 回生 96 名, 4 回生 81 名, 計 322 名, 2007 年度は 1 回生 42 名, 2 回生 60 名, 3 回生 82 名, 4 回生 92 名, 計 276 名, 全て奈良県の私立 O 大学の同一学科の女子大学生が調査に参加した。

質問紙 大学生生活充実度尺度 (45 項目) を使用した。既に述べたように, 大学生生活充実度尺度は 1 回生を対象とした先行研究 (川上他, 2005) において“交友満足”“学業満足”“不安”“適応”“可能性”の 5 因子が抽出されている。

手続き 質問紙を授業内にて配布し, 被調査者に回答を求め, 記入後質問紙を回収した。

結果と考察

1~4 回生を対象とした横断的データによる大学生生活充実度尺度の因子分析

大学生生活充実度尺度 45 項目について, 2006 年度の全学年データを対象として因子分析 (主因子法, Promax 回転, 因子負荷量が .40 に満たない項目は削除して再分析) を行い, 解釈可能性から 4 因子解を採用した (Table 1)。第 1 因子は「大学では積極的に取り組めるものがある」, 「大学では成長できそうだ」など, 大学や大学生生活に自分

が合っていると感じられるかどうかを表す 26 項目に高く負荷していたため, これを“フィット感”と命名した。第 2 因子は「大学の友人の中では浮いていると感じる」, 「学内の友人関係に満足している」など, 大学での交友関係に関する 11 項目に高く負荷していたため, これを“交友満足”と命名した。第 3 因子は「学びたいことが大学で学べている」, 「興味のあることが大学で学べている」など, 学業に関する 8 項目に高く負荷していたため, これを“学業満足”と命名した。第 4 因子は「これからの大学生活の先が見えず不安である」, 「将来の進路について不安である」など, 不安に関する 4 項目に高く負荷していたため, これを“不安”と命名した。

各因子が高く負荷する項目によって, 大学生生活充実感に関する各因子を測定する下位尺度を構成した。また, 各下位尺度の内的整合性を検討するために, 各下位尺度に関して Cronbach の α 係数を算出したところ, 各下位尺度の α 係数は .920 ~ .687 とほぼ十分な値が得られた。そこで, 各下位尺度を構成する項目の合計得点を項目数で除した値を算出し, それぞれを“フィット感”得点, “交友満足”得点, “学業満足”得点, “不安”得点とした。

1 回生のデータを対象として大学生生活充実度の因子分析を行った川上他 (2005) においては, “交友満足”“学業満足”“不安”“適応”“可能性”の 5 因子が抽出されており, 本研究において採用された 4 因子解と比較すると, 川上他 (2005) における“学業満足”因子, “適応”因子, “可能性”因子が, 本研究における“フィット感”因子, “学業満足”因子に分割・統合された印象である。つまり, 川上他 (2005) における“学業満足”因子と本研究における“学業満足”因子とは, 同じ因子名が付けられているものの, その意味に関しては微妙に異なるといえる。

このように因子の内容に若干の違いが生じていることや, 本研究において“フィット感”因子が

Table 1 大学生生活充実度尺度の因子分析結果 (主因子法・Promax 回転)

	I	II	III	IV
第1因子：フィット感 ($\alpha = .920$)				
大学では積極的に取り組めるものがある。	.803	-.042	-.115	-.126
大学で自分が成長できそうだ。	.800	-.022	-.044	-.047
大学ではいろいろなことができそうだ。	.774	.066	-.039	.087
自分のやりたいことが大学で見つかりそうだ。	.725	-.163	.095	-.147
大学で、今後の生き方について考えられそうだ。	.721	.027	-.133	-.052
大学ではいろいろな可能性が開けていると思う。	.706	.022	-.013	.026
大学で熱中できるものがある。	.698	-.005	-.016	-.122
大学生生活に意味を感じている。	.602	.046	.088	-.064
大学では自分の意志が尊重されていると感じる。	.592	.047	-.074	.064
大学の授業が面白い。	.566	-.023	.299	.114
大学で学ぶことで自分を深めることができそうだ。	.557	-.208	.304	-.019
大学での自分に自信が持てる。	.530	.273	-.155	-.180
大学で親しくできる先輩がいる。	.518	.001	-.165	-.024
大学で学ぼうえで、教員からよくサポートされていると感じる。	.506	-.043	.163	.091
大学では将来役に立ちそうなことが学べている。	.486	.025	.305	.126
大学教員の熱意を感じる。	.479	.059	.157	.230
第2因子：交友満足 ($\alpha = .916$)				
大学の友人の中では浮いていると感じる。	.268	-.870	-.023	-.073
学内の友人関係に満足している。	-.070	.785	.066	-.029
大学では周りの人と楽しい時間を共有している。	.196	.777	-.051	.103
大学で孤立感をおぼえることがある。	.166	-.776	-.013	.065
大学で本当に親しい友人はいない。	.059	-.742	-.028	-.066
大学では周囲に溶け込んでいる。	.172	.723	-.123	-.041
大学で良い友人に出会えた。	.058	.722	.003	.191
大学で寂しさを感じる。	.110	-.712	-.030	.180
大学生生活が楽しい。	.358	.586	.038	.083
大学は居心地が良い。	.331	.496	.083	.029
大学での交友関係はせまい。	-.152	-.455	.128	.065
第3因子：学業満足 ($\alpha = .842$)				
学びたいことが大学で学べている。	.209	-.168	.678	-.028
興味のあることが大学で学べている。	.370	-.149	.607	.035
心理学は自分に合っていないような気がする。	.029	-.030	-.570	.085
心理学科の授業内容に満足している。	.254	-.023	.537	.111
授業内容が予想していたものと違う。	.192	-.021	-.536	.151
大学を辞めたくなくなることがある。	.064	-.256	-.519	.214
この大学が嫌で他の大学に移りたいと思うことがある。	.062	-.314	-.430	.074
この大学は自分に合っていないような気がする。	-.097	-.350	-.418	.039
第4因子：不安 ($\alpha = .687$)				
これからの大学生活の先が見えず不安である。	-.029	-.097	-.100	.646
将来の進路について不安である。	-.110	.125	.049	.592
4年間の大学生活で何をしたら良いかわからない。	-.272	-.024	-.109	.488
ちゃんと卒業できるかどうか不安である。	.244	.026	-.288	.464
因子間相関				
I	—	.482	.666	-.294
II		—	.399	-.348
III			—	-.211
IV				—

抽出されたことに関しては、やはり1回生という初年次の段階と、それ以降(2~4回生)のより大学生生活の経験を経た後に感じられる大学生生活充実感とでは、その中身が微妙に変化することが示唆されたといえる。したがって、大学生生活充実感の学年間差や推移について検討する際には、本研

究の1回生から4回生までのすべての学年を対象とした因子分析結果に基づいて構成された大学生生活充実度尺度の下位尺度を使用するのが適切であると考えられる。そこで以下の分析では、本研究における各下位尺度得点を使用することにする。

2006年度全学年横断データによる大学生生活充実度の学年差の分析

2006年度における大学生生活充実度各下位尺度における学年間差を1要因の分散分析により検討した (Fig. 1)。その結果, “フィット感” ($F(3,315)=2.72, p < .05$), “交友満足” ($F(3,315)=3.52, p < .05$), “学業満足” ($F(3,316)=7.49, p < .01$), “不安” ($F(3,315)=2.72, p < .05$) のすべてにおいて有意差が認められた。Tukey法による多重比較を行ったところ, “フィット感” では1・2回生より4回生で得点が高くなる傾向が認められた ($p < .10$)。 “交友満足” では2回生より4回生で得点があり高く ($p < .01$), “学業満足” では2回生より3・4回生 ($p < .01$), 1回生より4回生 ($p < .05$) で得点があり高かった。 “不安” では1~3回生より4回生で得点があり低かった (それぞれ, $p < .01; p < .01; p < .05$)。

以上より, 4回生になると大学への全般的なフィット感が高まる一方, 大学生生活における不安は和らぐことが明らかにされた。また, 学業や交友関係

の面での満足感については2回生から3回生にかけて, ひとつの転機を迎えることが示唆された。被調査者の属する学科は3回生から“ゼミ”が始動するカリキュラムがとられており, このことから, 大学生生活においてゼミの活動が具体化・本格化することと学業・交友関係面で充実感が高まることに関連しているという仮説を立てることも可能である。すなわち, 3回生でゼミがスタートすることに伴い, 自らの興味関心に基づいて主体的に大学生生活を送ることができるようになり, さらにゼミで新たな交友関係を形成することで, 大学生生活充実度が上昇すると考えられる。逆に言えばゼミが始まる前の2回生は, 学業面ではまだ主体的に学ぶ意識が持ちにくく, 交友面でも1回生時の関係が揺らぎ始める時期であるために, 充実感が低くなりがちなのだといえるかもしれない。

しかし, この分析結果として明らかにされた学年間差はコホート差である可能性もある。そこで次に2007年度全学年横断データを分析し, 上記の結果の妥当性について検討する。

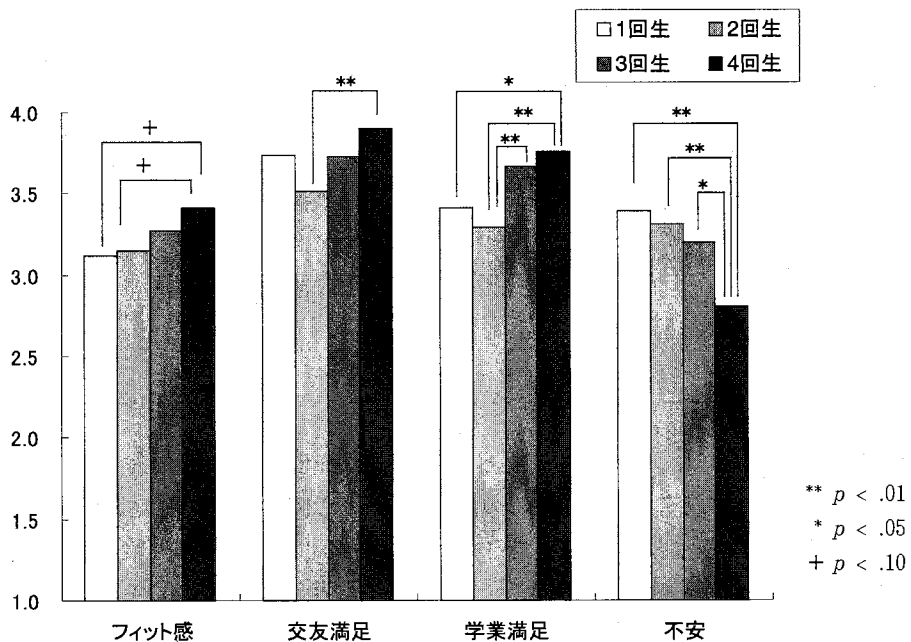


Fig. 1 2006年度全学年横断データによる大学生生活充実度の推移

2007年度全学年横断データによる大学生生活充実度の学年差の分析

2007年度に調査した全学年横断データに関して、2006年度データと同様に、大学生生活充実度尺度の各下位尺度得点を算出した。さらに各下位尺度得点に関して、学年間の差異が認められるか否かを2006年度データと同様に1要因の分散分析によって検討した (Fig. 2)。その結果、“フィット感” ($F(3,272)=2.82, p < .05$)、“交友満足” ($F(3,272)=3.37, p < .05$)、“学業満足” ($F(3,272)=7.59, p < .01$)、“不安” ($F(3,272)=22.40, p < .01$)の全てにおいて有意な学年間差が認められた。Tukey法による多重比較を行ったところ、“フィット感”では2回生より4回生で得点が有意に高く ($p < .05$)、“交友満足”では3回生より4回生で得点が有意に高く ($p < .05$)、“学業満足”では1~3回生より4回生で得点が有意に高かった (それぞれ $p < .05$; $p < .01$; $p < .05$)。また、“不安”では2回生より3回生 ($p < .05$)、1~3回生より4回生 (いずれも $p < .01$) で得点が有意に低くなった。

以上より、4回生になると大学生生活における不安が和らぐという点に関しては、2006年度データによる分析と一致する結果が得られたことから、この結果の妥当性が支持された。一方、大学への全般的なフィット感や、学業面、交友関係面での充実度の学年差に関しては、4回生において最も高いという点については2006年度データと2007年度データで一致する結果が得られたが、他の点では完全に一致する結果は得られなかった。特に、2006年度全学年横断データの分析結果から示唆された、“学業や交友関係の面での充実感については2回生から3回生にかけてひとつの転機を迎え、大学生生活においてゼミの活動が具体化・本格化することと学業・交友関係面で充実感が高まることに関連している”という仮説は、2007年度データにおいては支持されなかった。

研究1のまとめ

研究1の結果、4回生になると大学生生活における不安が和らぎ、大学生生活充実度は4回生において最も高いことが明らかにされた。また、2006

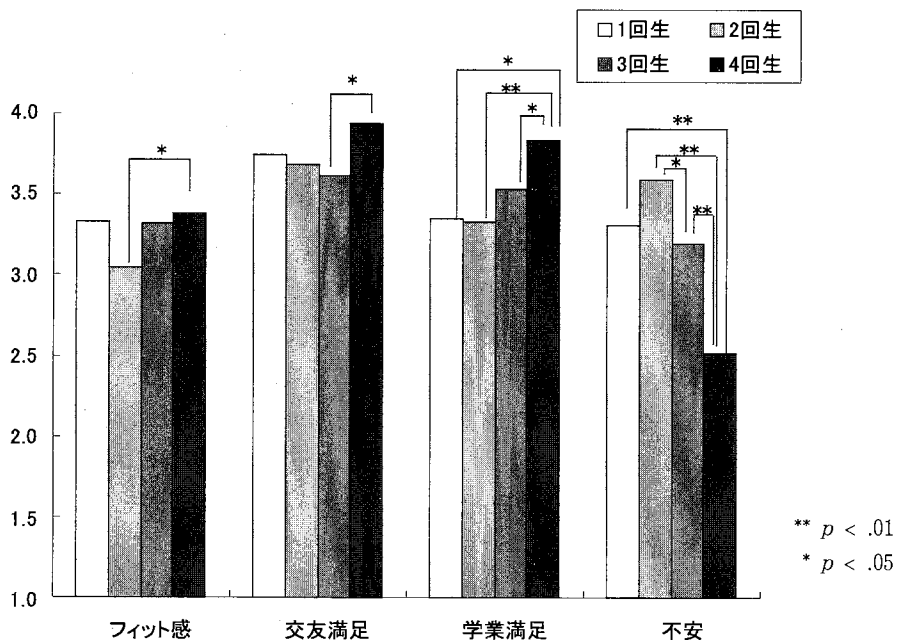


Fig. 2 2007年度全学年横断データによる大学生生活充実度の推移

年度全学年横断データの分析結果から、学業や交友関係の面での充実感については2回生から3回生にかけて、ひとつの転機を迎えることが示唆され、大学生活においてゼミの活動が具体化・本格化することと学業・交友関係面で充実感が高まることに関連しているという仮説が立てられた。しかし、2007年度全学年横断データの分析結果からは、この仮説は支持されず、学業や交友関係面での充実感の2回生から3回生にかけての高まりが、コホート差に由来するものである可能性も示唆された。そこで研究2では、特定の学年に対象を絞り縦断的に大学生活充実度の4年間にわたる推移について分析を行い、研究1において明らかにされたことや示唆された仮説について検証することを目的とする。

研究2

目的

大学生活充実度の縦断的データからその4年間にわたる推移を検討し、研究1で得られた結果との比較と仮説の検証を行う。

方法

調査時期 2005年から2008年にかけて、1回生時は5月、2回生時以降は10～11月時点における縦断的調査を実施した。

被調査者 奈良県の私立O大学の一学科に属する、入学年次が2005年となる学年の女子大学生（1回生時101名；2回生時84名；3回生時82名；4回生時85名）が調査に参加した。このうち4年間にわたる4調査時点すべてに参加した57名の被調査者のみを分析の対象とした。なお本研究の被調査者は、研究1における2006年度2回生被調査者と同一の集団である。

質問紙 大学生活充実度尺度（川上他，2005）を用いた。

手続き 質問紙を複数の授業内にて配布し、被

調査者にその場で回答を求めた。質問紙は授業ごとにまとめて回収した。

結果と考察

大学生生活充実度尺度の各下位尺度、“フィット感”、“交友満足”、“学業満足”、“不安”を従属変数とし、学年間差が認められるか否かを1要因の分散分析によって検討した（Fig. 3）。その結果、“フィット感”（ $F(3,168)=7.82, p < .01$ ），“交友満足”（ $F(3,168)=4.44, p < .01$ ），“学業満足”（ $F(3,168)=11.51, p < .01$ ），“不安”（ $F(3,168)=7.31, p < .01$ ）の全てにおいて1%水準で有意な学年間差が認められた。

多重比較検定の結果、“フィット感”では4回生の得点が1～3回生の得点より有意に高く（ $p < .05$ ； $p < .01$ ； $p < .01$ ），“交友満足”では4回生時の得点が2・3回生時より有意に高く（ $p < .05$ ； $p < .01$ ），“学業満足”では4回生時の得点が1～3回生時より有意に高かった（いずれも $p < .01$ ）。また、“不安”は4回生時の得点が1～3回生時より有意に低かった（いずれも $p < .01$ ）。

以上より、全体を通じて学生生活の充実度は最終学年である4回生時において最も高まることが示された。4回生時の充実度が全般的に高まるという本研究の結果は、研究1における2006年度全学年横断データおよび2007年度全学年横断データから得られた結果と完全に一致するものである。

一方、他の調査時点間の差はいずれも認められなかった。研究1では、3回生時での学業や交友関係の面における転機が存在を示唆する結果が2006年度全学年横断データから得られているが、本研究からはそのような結果は得られず、“2回生から3回生にかけてゼミ活動が本格化することでひとつの転機を迎え、そのことが大学生活の充実感向上に関連してくる”という仮説は支持されなかった。よって研究2の結果は、研究1の2007年度データの分析を支持する結果と整合的なものとなっている。しかも、研究1の2007年度デー

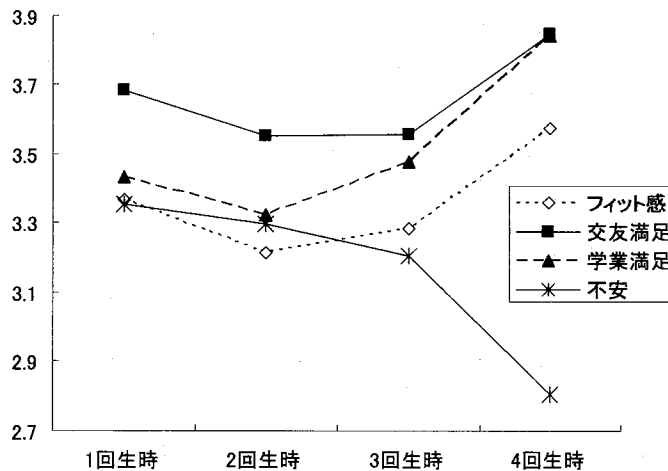


Fig. 3 縦断データから得られた大学生生活充実度の年次推移

タにおいて2回生と3回生時の間に見られた不安の差さえもが、本研究からは得られていない。つまり、ゼミ分属に伴う変化が全く見られていないことになる。このことについては、以下のように考えることができる。

第一に、ゼミ分属が研究1で解釈されたように必ずしも学生生活の充実にポジティブな結果をもたらすものではないということが推察される。これに関してゼミごとの分析も視野に入れる必要があるが、データサイズの問題から統計的な分析は困難である。コホート差も視野に入れた上で、こうした大学生生活充実度の変化と具体的な教育的取組との関連を検討していくことが今後求められる。

第二に、本研究で扱われたデータが適応的な被調査者のみに絞られている可能性があることが考えられる。少なくとも4回生時での調査以前に休・退学をした学生は含まれておらず、また4調査時点での回答がすべて揃っているということは、調査実施授業にいずれも出席していたことになり、適応的でない学生が分析対象データに含まれている可能性は低い。そのため、1~3回生の充実度が安定していたとも考えられる。ただし、本研究ではこのことを直接裏付ける分析は行っていない。

以上より、大学生生活充実度が最終年度に上がるという全般的な推移傾向は確かなものとして明らか

かにされたが、2回生から3回生にかけて大学生生活の充実度が学業や交友関係、不安の面などでポジティブに変化するという仮説は支持されなかった。しかし、4年間分揃った単一入学年次の学生集団のデータのみの分析では、横断データに見られた1~3回生時の特徴が平均化されている可能性が残ることやコホート要因の影響も考えられる。そこで研究3では、研究1で用いた2006年度と2007年度の調査から3つの同一入学年次集団の2年間のデータを取り出して比較を行う。すなわち2006・2007年度がそれぞれ1-2回生時(2006年度入学生)、2-3回生時(2005年度入学生)、3-4回生時(2004年度入学生)という、3つのコホートの2時点間の縦断データの分析を行うこととする。

研究3

目的

連続する2年度間の大学生生活充実度のデータから1-2回生、2-3回生、3-4回生間の推移を分析し、研究1・2で得られた結果と比較検討を行う。

方法

研究1の調査によって得たデータのうち、2006

年度の1～3回生と2007年度の2～4回生の中から両年度いずれの調査にも参加した被調査者187名のデータ（内訳は2006-2007年度の1-2回生が47名、2-3回生が64名、3-4回生が76名）を用いて分析を行った。調査時期・質問紙および手続きは研究1と同一である。

結果と考察

2006年度の1・2・3回生が2007年度にそれぞれ2・3・4回生に進級して大学生生活充実度尺度の各下位尺度得点がどのように推移したかをt検定により分析した（Fig. 4-1～Fig. 4-4）。その結

果，“フィット感”において2006-2007年度にかけて3回生から4回生に進級した学生の得点が上昇する傾向が見られ（ $t(73)=1.86, p < .10$ ），“交友満足”では3回生から4回生に進級した学生の得点が有意に上昇していた（ $t(75)=3.18, p < .01$ ）。“学業満足”は、2回生から3回生および3回生から4回生に進級した学生の得点が有意に上昇していた（ $t(63)=2.08, p < .05$; $t(75)=2.92, p < .01$ ）。“不安”では3回生から4回生に進級した学生の得点が有意に低下していた（ $t(75)=6.00, p < .01$ ）。

以上より研究1・2と同じく、学生生活は最終

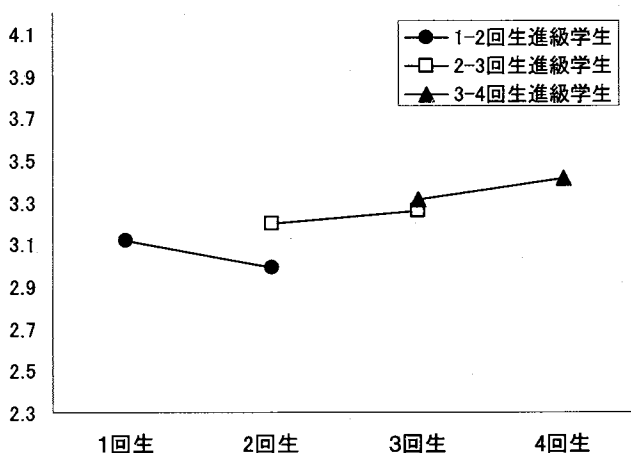


Fig. 4-1 2006 から 2007 年度に進級した各学年のフィット感の推移

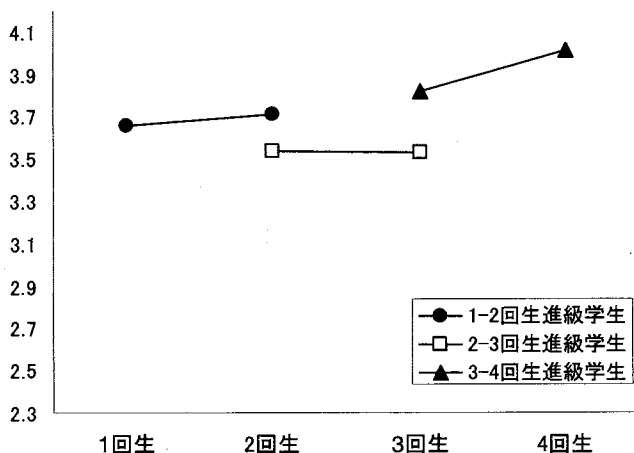


Fig. 4-2 2006 から 2007 年度に進級した各学年の交友満足の推移

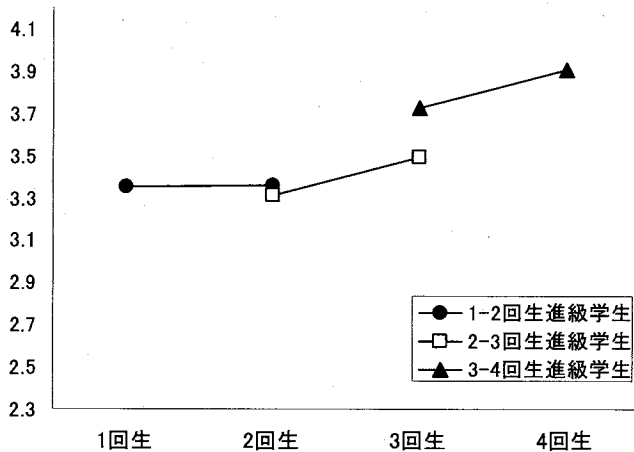


Fig. 4-3 2006 から 2007 年度に進級した各学年の学業満足の推移

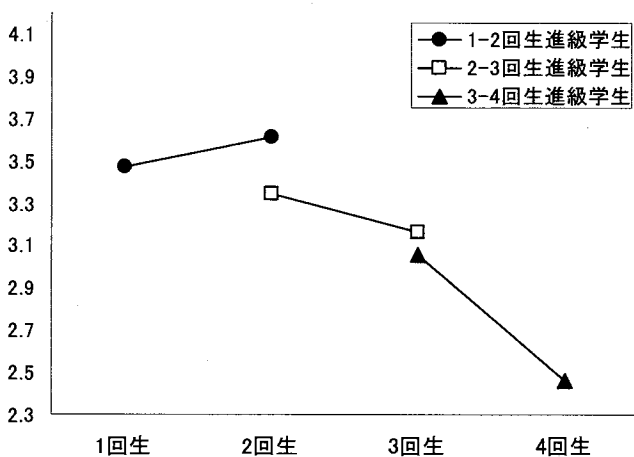


Fig. 4-4 2006 から 2007 年度に進級した各学年の不安の推移

学年である 4 回生において最も充実感が高まること
が示された。また、1 回生から 2 回生にかけて
充実度の変動がほとんど見られないことも、これ
までとほぼ共通した結果である。一方、学業に関
する満足感が 2 回生から 3 回生にかけて上昇する
ことが示され、研究 1 の 2007 年度データや研究
2 とは異なり、研究 1 の 2006 年度横断データか
ら得られた仮説を一部支持する結果となった。と
ころでこの研究 3 における 2-3 回生時の推移の
データは、2005 年度入学生すなわち研究 2 と同
一の調査対象群から得たデータである。同じ調査
対象集団のデータでありながら異なる分析結果と

なったのは、研究 2 が 1~4 回生の 4 年にわたる
全ての調査に参加した 57 名の被調査者を分析の
対象として 4 学年間の差の分散分析と多重比較を
行ったのに対し、この研究 3 では 2006・2007 年
度の 2 度の調査に参加した被調査者 64 名のデー
タを t 検定により分析したことによるものと考え
られる。

総合考察

大学生生活充実度尺度について

研究 1 で示されたように、川上他 (2005) が大

学1回生のみによって抽出した大学生生活充実度尺度の因子は、4学年全体のデータによって得られた因子とは異なるものであった。そこで今回の結果に基づき、現時点では大学生生活充実度尺度を“フィット感”、“交友満足”、“学業満足”、“不安”の4つの下位尺度によって構成されるものと考え、以降の調査データの分析を行った。その結果は、たとえば4回生において充実度が最も高まるなど田中・菅(2007)の結果と整合的であり、大学生生活充実度尺度の妥当性を支持する結果であった。しかし、因子構造や下位尺度の項目構成などについてのさらなる妥当性を確かめるには、複数年度のデータを統合して分析したり、異なる年度のデータによる因子分析結果で一貫して抽出される因子や項目を選定したりするなど、さらに検討することが必要であろう。

大学生生活充実度の学年差と年次推移

本研究においてまずはっきりと示されたのは、4回生時に大学生生活の充実度全般が最も高まるという結果である。少なくとも〇大学の調査対象学科において、このことは年度に関わらず安定して見られる現象であると言える。4回生時に最も充実度が高まる理由として、大学生生活の最終段階へ到達したことによる見通しの良さ、卒業論文への取り組みによる高度な専門知識・スキルの修得、登校日数の減少からくる学内での無理な人間関係からの解放といった要因が影響していると考えられる。また、3回生末頃から調査時の4回生秋頃までに就職活動が盛んに行われるが、そこでの自己分析を通じて改めて大学生生活の意義を確認する機会を持った学生が多数いる可能性も考えられる。今後はこの4回生時に充実度の高まりをもたらす要因を明らかにすることが重要である。

その他の学年に関しては、特に2回生から3回生にかけての大学生生活充実度の推移について、異なる分析結果が得られた。果たして2回生から3回生にかけて充実度が高まるのか否かについては、

今後継続的に大学生生活充実度のデータを取り続けることである程度傾向を見ることができると考えられる。まずは引き続きデータを収集して、2-3回生間の充実度の推移を確認することが課題となる。その上で、2-3回生にかけての充実度の推移を左右する要因にゼミ分属は関連しているのか、あるいはその他の要因が影響を与えているのか、等を明らかにするには、研究2で述べたようにコホート差も考慮して、より具体的な学生への教育内容やカリキュラムとの関連を調べていくことが必要であろう。

最後に、1回生から2回生にかけての大学生生活充実度の推移は、研究3で述べたように本研究全体からはほとんど変化がないという結果が示されている。ただしFig.1~Fig.3を見ると、各下位尺度の4学年間の差異のグラフにおいて2回生を底としたU字あるいは逆への字型の曲線を描いているものが少なくない。4月から7月までの間に大学新生の不応感が増大するという報告(水野・田積・炭谷・多胡, 2007)や、筆者らの過去の研究(佐久田・奥田・川上・坂田, 2007)でも、1回生時は入学当初から時間が経過するにつれて、大学に対する“フィット感”が一部の学生において低下することを示唆するデータがある。本研究では統計的には1回生と2回生間の有意な差は見られなかったが、初年次教育なども関連してその推移の詳細は今後検討を加える余地があると考えられる。

引用文献

- 藤井義久(1998). 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 広沢俊宗(2007). 大学新生の適応に関する研究(Ⅰ) —学習面での適応-不適応に関わる諸変数の検討— 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138.
- 石倉健二・吉岡久美子(2004). 大学生生活における心身の健康に関する調査—留学生と日本人学生の適応とヘルパー志向性— 長崎国際大学論叢, 4, 225-232.

- 亀岡聖朗 (2006). 新大学への環境移行に関する心理学的研究—環境認知と愛着感の大学への適応との関連から— 桐生短期大学紀要, 17, 151-158.
- 片倉久美子・土田幸子 (1993). 本学における学生生活の適応に関する実態調査 岩手女子看護短期大学紀要, 1, 89-98.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2005). 新入生オリエンテーションに関する研究 (1) 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 1251.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2007). 大学生生活充実度における学年差に関する研究 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 71.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2008). 大学生生活充実度における学年差に関する研究 (2) 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 193.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2009). 大学生生活充実度における学年差に関する研究 (3) 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 576.
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度 (高校生用) の作成— 岩手大学教育学部研究年報, 59, 111-120.
- 松原達哉・宮崎圭子・三宅拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, 4, 1-12.
- 水野邦夫・田積徹・炭谷将史・多胡陽介 (2007). 大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討 聖泉論叢, 15, 125-140.
- 大橋正夫・吉田俊和・坂西友秀 (1982). 大学における教師—学生の間関係 (I) 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 29, 279-297.
- 及川恵・坂本真土 (2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討— 京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 大久保智生・青柳肇 (2005). 大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するのか?— 人間科学研究, 18, 207-213.
- 酒井恵子 (2003). 大阪工業大学知的財産学部初年度入学者の入学動機・学習期待・入学後の印象 大阪工業大学紀要 (人文社会篇), 48, 1-12.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) —オリエンテーションに対する態度の基礎データ— 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-71.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2007). 新入生オリエンテーションに関する研究 (3) —オリエンテーション成果が大学生生活充実度の変動に及ぼす影響— 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 1169.
- 田中存・菅千索 (2007). 大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 57, 15-22.
- 若杉里実・安田恭子・榊原國城 (2004). 大学生の満足感と教育環境要因 (1) 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 218.
- 吉田俊和・坂西友秀 (1984). 大学における教師—学生の間関係 (II) 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 31, 211-225.
- 吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 75-98.

The Transition of University Life Satisfaction through the First Year to the Fourth Year in Longitudinal and Cross Sectional Data.

Osaka Shoin Women's University

*Akira OKUDA, Masahiro KAWAKAMI,
Hiroyuki SAKATA, & Yuko SAKUTA*

ABSTRACT

To recognize the meaningfulness of university life, it is important for students to feel adapted and to get contentment to the university. So in this study, based on earlier studies, we investigated university life satisfaction of students through the first year to the fourth year, examined factor structure, and analyzed differences of university life satisfaction among the years from the multiple (including longitudinal and cross sectional) point of view and data. First, four factors were extracted from the scale of university life satisfaction using factor analysis; "sense of fit", "companionship satisfaction", "study satisfaction", and "anxiety". Then the longitudinal and cross sectional data through the first to fourth year across several years was examined and indicated that university life satisfaction increase most in the last year of their university life. Whereas the transition of university life satisfaction was rather little from the first to second year, and from the second to third year, two inconsistent results were showed; one analysis insisted university life satisfaction increases partially from the second to third year, but the other denied the increment. It is necessary to gather more data, and reconsider those results and analyze carefully what causes the difference of university life satisfaction among the years.

Key words: university life satisfaction, adaptation to the university life, difference between the years, cross sectional data, longitudinal data